

---

# いつわりの恋

ひろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつわりの恋

### 【Nコード】

N1839L

### 【作者名】

ひろ

### 【あらすじ】

バンド仲間である奏と樹<sup>かなでいつき</sup>。

2人の中にある悲しい過去が、悲しい恋を縛りつけ……。すれ違う恋心。

## その1 (前書き)

この作品はB L、ボーイズラブです。

ご理解いただけない方はご遠慮ください。> m ) ( m <

## その1

雨が降っていた。

アスファルトに小さな跡を残しながら降って来る。

今日はとっても寒い日で、その雨が何時の間にか雪へと姿を変えていた。

横では樹いつきが小さく身じろぎ、起こしてしまつたかと顔を覗き込む。

しかし樹は再び小さな寢息をたて起きる気配はなかつた。

奏かなではホツと息を吐き静かにベッドを後にした。

たいした防寒着はなかつたが、マフラーがあつたので首に巻き外に  
でる。

ちらちらと舞う雪を眺めつつマンションの前に広がる砂浜に足を踏  
み入れた。

雪を見ると思い出す・・・あの笑顔。

瞼を閉じると笑顔はまるで自分に向けられているようで、寒いはず  
の心が温まつた。

そのまま歩みを進め砂浜を歩く。

そうして僕は思い出していた、2年前の出来事を・・・。

「かなちゃん!!」

おもむろに呼ばれ、僕は彼を見た。笑顔で僕の前まで小走りに近づ  
いて来た彼に、頬が緩む。

「どうしたのかな? 緋呂ちゃん」

そう言うと、その笑顔が更に広がる。

「何処に行くの？皆あっちにいるよ？」

緋呂の向こうにメンバーの姿が見えた。

「何処にも行かないよ。ただちよつと散歩にでもね……」

僕の返答に緋呂は頬を膨らませる。

「なんか悩みでもあるの？1人で悩むより仲間に話せば楽になるんじゃない？」

緋呂の言葉に僕は苦笑で答えるしかなかった。

「？」

緋呂の顔が疑問符を打つ。

まさか、言えるわけもない。勿論メンバーにも言えるはずもなかった。

「いや、なんでもないよ。先に行つてってくれる？すぐに追いかけるから」

僕の言葉にしぶしぶながら頷いた緋呂は、又小走りに僕から遠ざかりメンバーの元に辿り着いた。それを確認し、僕の視線は足元へと向かう。

その後の緋呂の行動を見届ける事は出来なかったから……。

あの後、緋呂は当然のように弓弦ゆずるの横を歩くはずで。

報われない想いを抱いていた僕にとって、その光景はあまりにも辛過ぎた。

近くにあったベンチに腰を掛け、目の前に広がる景色を眺める。

どの位そうしていただろうか。

気が付くと、横に人がいる気配がした。驚きながら頭を向けると、メンバーの1人である樹がそこにいた。

「どうしたの？いっちゃん」

驚きを隠しながら声を発すると、綺麗な顔が歪む。

「ごめん、何時から居たの？声掛けてくれればいいのに……」

気まずさを隠すように言っただけけれど、樹は答えてくれなかった。

僕は苦笑を浮かべながら、再び景色に目を向ける。その時、急に樹が立ち上がった。

驚き再び彼を見る。

彼は何も言わずに僕にその綺麗な手を差し出し、僕は溜息を吐きその手を握った。

奏がベッドから出た事は気付いていた。

シャワーの音が消え、扉の開閉の音を確認すると、俺は体を起こした。

とたんに冷気が体を包み、ぶるりと震える。そうして溜息を吐いた。窓の外を見れば、ちらちらと雪が降っている。

彼はコートのある場所を知らないはずだから薄着のまま外に出たはずだ。

俺は再び溜息を吐きその体を動かした……。

緋呂の声がした気がして振り返る。

しかし、早朝の、しかも雪が降っている砂浜には自分以外の姿はなかった。

自嘲ぎみにふつと笑い再び歩き出す。

そうして、2年前の出来事に想いを馳せた。

「あ、やっと来た」

ちよつと怒ったような顔をし緋呂は僕と樹を迎える。

樹に握られている手を思い出し、僕は急いでその手を離した。

樹が眉間に皺を寄せたのが解ったけれど、気付かないふりをした。

「待たせてごめんね。さあ、行こうか？」

僕は努めて明るい顔を作り歩きます。その横に弓弦が立った。

「・・・大丈夫かよ、顔色悪いぞ」

ぼそりと告げられた言葉に何も言わず頷く。弓弦の顔を見られなかった。

バンドのリーダーである悠基ゆうきの音が、気まずい空気を振り払うかの様に陽気に舞う。

僕の心はそんな声に励まされた気がした。

5人で歩みを進め、小さな店に着く。

扉を開けた僕たちに店員さんの眩しい笑顔が出迎えた。

「・・・予約をした、蓮田はすだですが・・・」

樹の声到店員が答え、案内をする。その後につき店奥にある、個室型のテーブルに通された。

それぞれが席に着き・・・ちらりと見ると、やっぱり緋呂は弓弦の隣に座った。

僕は2人から一番遠い席に付く。樹が当然のようにその隣に腰を下ろした。

コースを頼んでおいたのか、ウェイターが規則正しくテーブルをセッティングして行き、全て整う。ワイングラスにワインが注がれるのを待ち、樹がグラスを持ち僕たちを1人1人見た。

「今日は忙しい所、集まってくれてありがとう」

まずはそんな一言から始まった。

「今日みんなを集めたのは・・・」

小さな間が開く。

「なんだよ、樹」

悠基が笑いながらちやちやを入れた。樹の目が僕を捉える。その視線に気付いた僕は、視線で疑問を唱えたけれど、樹は何事もなく話し出した。

その言葉に視界が真っ暗になる。

「・・・弓弦と緋呂が来週イギリスに引越す事が決まったので、壮行会を開こうと思った訳ですよ」

笑いながらの樹の言葉に、僕はグラスを落としそうになった。

そうして2人の顔を見る。

2人は目を見交わしながら微笑し、緋呂はその頬を赤らめていた。

「まあ、そういう事で、2人の門出を祝い乾杯としましょう」

樹がそう言いグラスを軽く上にあげ宴のスタートを告げた

コートを手には俺は外に出る。

ブルリと寒さに体が震えた。

ホントに寒さだけか？

と自問しながら奏の姿を探す。砂浜に向かったのはなんとなく解っていたから、彼の姿を求めて歩き出した。

そうして、あの日も、夜になり雪が降っていたな、と思いだしていた。

雪がその勢いを増した気がして空を仰ぐ。

雲が分厚く覆い空の蒼は見えない。

まるで自分の心を映したかのようなその景色に、眼の奥が痛くなつた。

涙が顔を出す合図と知っている僕は急いで瞼を閉じる。

その瞼の裏にあの顔が覗く。まるで天使のような、全てを寛容に許すあの笑顔。

そうして、一言、彼は僕に告げたのだ・・・

『・・・ごめんね、かなちゃん』

謝らないで・・・緋呂・・・

「奏！」

突然声を掛けられ飛び上りそうになった。

声の主は樹。幻を振り払うように数回瞬きをし彼を見た。

「ごめん、起しちゃった？」

そう告げ、視線を海に向ける。

「・・・そんな恰好で外に出るなよ、風邪ひくぞ?」

そう、優しく言い樹は持つていたコートを差し出した。

そのコートを笑いながら受取り、

「・・・そうだね、ありがとう」

今度こそ、彼の目を見答えた。

緋呂と弓弦が付き合っていたのはなんとなく解っていた。

2人の交わす視線が何を意味するのか、密かに緋呂を見つめていた僕にはすぐに解った。だから、こういう日がくるのも何となく覚悟していたのかも知れない。

2人の壮行会の後、僕は1人になりたくて、次の店に向かうと言う4人と別れ馴染みの海に向かっていった。

暗い砂浜には、明るい時間には必ずいるサーファーの姿さえ写し出しはしない。

まるで僕の今の心境だな、と勝手に思い自嘲気味に笑う。

砂浜の上に腰かけ、暗い海を眺めた。波が打ち寄せる音だけが響き、ささくれ立つ心がゆつくりと解けるような気がした。

しばらく海を眺めていた僕の耳に、砂浜を踏みしめる音がした。規則正しく鳴る音はだんだんと僕に近づいて来る。

こんな時間に、ましては冬の海に好き好んで来るのは自分しかいないと思っていたから、とても驚いた。

明らかに近づいて来る音に、物思いに耽る事を諦め立ち上がるうとした僕は、思いがけない声を聞いた。

「かなちゃん」

今まさに他のメンバーと飲んでいるはずの、愛しい人の声。

暗闇の中目を凝らし、その姿を探した。声がした方向から人の影が段々と近づいて来る。

そのシルエツトが間違ひなく緋呂のものだと解り慌てて立ち上がり、急いで彼の元へと走った。

「緋呂ちゃん?!どうしたの?!」

僕の言葉に彼はふわりと笑う。そうして持っていた物を僕へと差し出した。

それは、僕の好きな銘柄の缶ビールだった。差し出しながら反対の手にはもう一本。

「僕も抜けてきちゃった」

そう言つて笑つた緋呂は、今でも忘れられない……。

コートを受取り羽織つた奏に安堵の溜息が出る。

ちらちらと舞う雪が彼の頭にうつすらと積もつていて、おかしな焦りを感じた俺は少々乱暴にその雪を払つた。

「?・・・ああ、ありがとう」

そう弱々しく答えた奏に、胸が痛む。

なんど、数えることが出来ないほど体を重ねても、やっぱりあいつ・・・緋呂を忘れさせる事はできないらしい。

自分の無力感に笑いが零れた。

「?」

奏が横で首を傾げる。不安を打ち消すかのように、そんな奏を抱き締めた。

「いつちゃん?」

戸惑う奏を更に強く抱き締め、その耳に告げた。

「やっぱり・・・俺じゃダメなのか?」

奏の体が強張るのがわかつた……。



## 衝撃

「聞いてるか？樹」

突然その声を掛けられ、声の主を見る。

「ああ、聞いてるよ。2人の馴れ初めだろ？」

俺の返事に悠基は満足気に頷いた。

「そうだよ、それ！昔から緋呂くんと弓弦は仲良かったけどさあ。

まさか付き合ってた更にこれから海外で一緒に暮らす事になるなんて、やっぱり思ってもみなかったし」

笑いながら悠基の言葉に頷く。弓弦はそんな悠基の言葉に苦笑を浮かべていた。

今この場に奏と緋呂はいない。

奏は、やっぱり辛くなったのか食事が終わると、予定があると言って逃げていった。

ちよっと苛め過ぎたかな？と反省したりもしたけれど彼を自分の物にするにはこうするしかないのだ。

彼が誰を見ているのかなんて直ぐに解った。俺の視線には気付かずに緋呂の事を見詰めていたから……。

心優しい緋呂は、顔色の悪い奏を心配し、このバーに着いてから暫くして、

『……やっぱり、かなちゃんの事心配だから僕見てくるよ』

そう言い出て行った、場所はわかるのか、という弓弦の言葉にたぶんと告げ。

思い出も必要か、と思い、俺はそれを止める事はしなかった……。

「抜けて来たって……だめじゃないか、緋呂くん？君達の壮行会

だろ？」

缶ビールを受け取りながらそう告げると彼は急に真顔になった。

「・・・そうだけど、かなちゃん、何かあった？店でもずーっと怖い顔してたよ？」

緋呂の言葉に体が強張るのがわかる。僕は苦笑を浮かべ缶ビールのプルタブを開けた。

そのまま、砂浜に腰を降ろすと、緋呂も横に腰を降ろした。

「僕じゃ、だめ？何かあるんなら相談にのるよ？」

ビールの缶を煽りながら僕の顔を覗き込んだ緋呂は、未来に向け走り出した、清々しい顔をしていて・・・とても輝いていて見詰める事が困難だった。

だから・・・だったのかもしれない。その顔を見ていられなくて、彼の言葉を聞きたくなくて、その唇を塞いでいた。

僕の手からも、緋呂の手からも缶ビールが零れおちる。

そつと唇を離しその瞳を見詰めると、緋呂は理解できないような、何が起きたのか解らないような顔をしていた。

「・・・え・・・な、に？」

しばらくした後、バツと唇を抑えうるたえている緋呂がいた。

殴られる事も予想していたけれど、彼はそうしなかった。ただ、果然と僕を見詰める瞳がそこにはあった。

「・・・急に、ごめんね。これでわかっただろ？僕は、ずっと前から君が・・・緋呂が好きだったんだ。弓弦と君が恋人同士だってわかった今でも・・・」

そう告げ、ゆっくりと緋呂を押し倒す。そうして再びその唇に自分の物を押しつけた。

緋呂の体が強張るのが伝わる。僕の瞳には何時の間にか涙が浮かんでいた。

唇を離し緋呂の顔を見詰める。

その時だった。ふと、緋呂が声を発したのだ。

「・・・雪だ」

その言葉に空を見上げると、僕の頬に埃のような雪が舞い落ちた。そうして、僕の口から乾いた笑いが零れる。何故だか、全てがばかばかしくなり彼の上から退いた。

そうして砂浜に腰を降ろす。緋呂も体を起こし小さく笑った。

「かなちゃん」

そう呼ばれ、彼を見る。

「・・・全然知らなかった。かなちゃんが、僕の事そんな風に思っ  
ていてくれたなんて」

少し照れたように笑いそう言った緋呂は、ほんとに綺麗で、折角引  
つ込めた涙が再び僕を襲った。

「ありがとう、僕もかなちゃんの事好きだよ？とても・・・大切だと  
思ってる。・・・でも、やっぱり違うんだ。弓弦との、それとは・・・」

泣き笑いのような顔で、口下手な彼はそれでも一生懸命に答えてく  
れた。

「・・・うん」

僕は涙で揺れる声でなんとかそれだけ告げる。

緋呂は、そして天使のような笑顔で僕に告げたのだ。

「・・・ごめんね、かなちゃん」

弓弦の携帯が鳴る。

液晶を確認した弓弦が通話のボタンを押し、席を離れると悠基は徐  
に告げた。

「で？・・・樹はかなちゃんとうなってるわけ？」

直球な質問に思わず噴き出しそうになる。眉間に皺を寄せながら悠  
基を見詰めた。

「俺が気付かないと思った？・・・好きなんだろう？かなちゃんの事」  
流石、悪友だけある。俺の視線に気付いていたのだ。

俺は小さく笑い、

「別ににも。・・・だってあいつは他の人を見てるから」と呟いた。悠基も苦笑を浮かべる。

「・・・まあ、こればかりは、ね」

歯切れの悪い悠基の言葉に答えようと口を開いたけれど、弓弦が電話を終え店に入ってくるのが見えたから口を閉ざした。

「緋呂からだった。今、かなちゃんところちに向かっているって」

正直驚いた。まさか、こんなに早くしかも2人で帰ってくるなんて悠基と目を交わし、苦笑を浮かべる。

知らぬは弓弦ばかりなり・・・。

ホントにそうか？と思う。弓弦も実は奏の想いを知っているのではないか？知っていて緋呂を行かせたのではないか？そんな思いが俺を包む。

しかし、それこそ弓弦に確認するしか、知りうる手はない。

そんな事出来るわけもなく俺は静かに溜息を吐いた。

前を歩く緋呂に、僕は近づけないでいた。

あの後静かに

『皆の処に帰ろう？』

と告げた彼に、僕は異を唱える事が出来なかった。ただ涙を拭い、頷く事しか出来なかった。

きつかり1mの距離を保ちながら歩く僕に緋呂は言う。

「・・・かなちゃん、弓弦には内緒ね？・・・僕が怒られちゃうから。あいつ結構、束縛屋、嫉妬屋なんだ」

そう笑いながらの言葉に頷く。そうして再び「ごめんね」と告げた。『謝らないで』

と告げようとすけれど、やっぱり涙がこみ上げて来そうで頷く事しか出来ない。

緋呂に謝ってほしいわけじゃないのに言葉がでてこなかった。

そうして、みんなが待つバーにたどり着く。入口の前で急に立ち止

った緋呂は、僕を抱きしめる。そうして小さく笑い、静かに告げた。  
「・・・大丈夫？」

その問いに僕も精一杯の笑顔を向け頷く。緋呂はそれを見届けバーへの扉を開いた。

「い、つき・・・？どういう・・・意味？」

告げられた言葉の意味が怖くて、樹の顔が見られない。  
ぎゅっと、彼の服の裾を掴んだ。

「・・・まだ、忘れられないんだろ？緋呂の事」

自分の耳を疑った。周りが一気に暗くなる。

緋呂への気持ちは誰にも伝えてはいなかった。まさか樹が知っていたなんて思いもよらなかったのだ。

「な、んの事？」

精一杯の虚勢を張り答える。

僕を抱きしめる樹の腕が静かに解かれた。

そうして強引に口づけされる。びくっと反応し、しかしその口づけを受け入れた。

だんだんと深いものになり、息が切れたところようやく解放される。肩で呼吸を整えながら樹を見た。

ぎゅっと眉間に皺を寄せ、苦しい表情の樹が其処には居た。

「知ってたよ・・・。俺の視線にも気付かずにお前が誰を見ていたかなんて、それこそずっと前から！」

樹の告白に視界が歪む。

・・・知っていた・・・？

「知ってて、・・・だけど諦められなくて、あの日お前を強引に抱いたんだ!!」

真っ白になった僕を、再びあの日が襲う



## 真実

メンバーと合流した僕は、酒を浴びるほど飲んだ。そうして気がついた時には、僕と樹しかいなかった。

「……あ、れ？皆は？」

静かに酒を煽っている樹に、回らない舌で尋ねる。

眉間に皺を寄せながら、しかし樹は優しく答えてくれた。

「もう、とつくに帰ったよ」

時計を確認すると、もうすぐ其処に朝が来ていた。驚きながら彼を見る。

「……気が済んだか？」

樹の問いに、意味が解らないながらも頷いた。

それを見届けた樹は静かに立ち上がり僕を立たせると店を後にする。バーの外はうっすらと雪が積もっていて、足を取られてしまう僕に、樹は溜息を吐きながら支えてくれた。

体を預けてしまうと妙に温かく、居心地が良い。ふわふわした感覚を楽しみながら歩いた。

どの位あるいただけるのか、気が付くと樹のマンションの前に着いていた。

「あれ？いつちゃん家だ」

僕の言葉に樹は苦笑を浮かべる。

「醒めるまで、家で休んでいけ」

僕は素直に頷いていた。

彼の家に来るのは初めてだったのだ。好奇心もあったのだと思う。部屋に入るとそこは白に統一された空間だった。

慣れないその場所に僕は落ち着いて座って居る事が出来ない。

壁に埋め込まれたオーディオをいじってみたりし時間を潰した。

樹がカップを手に戻って来て、座る気にはなれなかった。

「どうしたの？ 奏。挙動不審なんだけど？」

笑いの含んだ言葉に戸惑う。僕は意を決し、ソファに腰を下ろした。

「いや、初めての場所だから、なんだか落ち着かなくて・・・」

その言葉に樹は苦笑を浮かべながら、紅茶の入ったカップを差し出した。

僕は素直に受け取り紅茶に口を付ける。そうして、ふと気になった。もう何年もメンバーとして公私共に過ごす事が多かったけれど、他のメンバーを含め一度も樹の家に招かれた事がない。家族と住んでいたころは別として疑問に思った。

そうしてその疑問を口にする。

「ねえ、一つ聞いていい？」

前置きに樹は頷く。

「もう何年も一緒に居るけど、一度も家に招かれた事ないよね？」  
僕の言葉に樹は動きを止めた。そうして僕を見つめる。

「・・・そうだね、それがどうかしたの？」

やんわりとだが拒絶を感じた。だけど、その時の僕はそれには気づかなかったのだ。

だから、次の言葉を投げかけていた。

「何か、理由でもあるの？」

樹の顔が真顔に変わる。ジッと見詰められ、居心地の悪い物を感じた。

「そんなに知りたい？」

樹の言葉に怖いものを感じながらも、好奇心には勝てずに頷く。

「・・・そうだな、理由は2つある。1つめは、仕事とプライベートは分けたい主義なんだ」

そう言い、小さく笑う樹に違和感を覚えた。

「・・・2つめは？」

恐る恐る、聞いてみる。何故だかそっちの方が真実に思えたのだ。

「2つめ?・・・これも俺自身の問題だけど、まあ、好きな人以外、恋人以外には家の敷居を跨がせたくないんだよ」

そう言い、徐に立ち上がった樹に僕は視線を合わせた。

「そう、なんだ。じゃあ今日僕が来たのは・・・ミス?」

妙な胸騒ぎに蓋をし、茶化すように告げた僕を樹が鼻で笑う。そうしてゆっくりと近づき僕の両肩に手を置いた。

「そう、思う?」

ぐっと肩に置かれた手に力が入るのが解る。驚いて上半身に力を込めたがあっさりとソファアの上に押し倒されていた。

「ちよ、い、つき?」

驚きのあまり声が上がずる。

「・・・奏が悪いんだよ?俺の気も知らなくて涼しい顔してそんな事言うから」

にっこりと笑い、しかしそれが合図だった。

すっと樹の顔が近づき口付けされる。

驚きのあまり、彼を突き飛ばそうとしたけれどビクともしない。

これはどういう事だ?と自問自答しながら彼の下から逃れようとするけれど、やっぱり上手くいかず、逆に段々と追い詰められて行く。樹の手が妖しく動き、それが意味する事を理解した時には既に衣服を剥がされた後だった。

「い、やだ!樹、やめて!!」

僕の叫び声に、しかし樹は動く事をやめなかった。

徐々に進められる行為にあせりは感じたものの、不思議と嫌ではなく飲み込まれて行く。

そうして、本当に拒めなかったのは、最中に何度も樹が呟いた言葉のせいだった。

熱い吐息の中で何度も何度も呟かれた言葉。まるで呪縛のようだった。

『・・・愛してる、奏・・・』

強引に抱いた後、奏の体を清めながら後悔が俺を襲う。

「何やってんだ、俺・・・」  
意識を手放していた奏を抱きしめながら呟き、こみ上げて来る涙を弄んでいた。

失恋をし、自棄酒をくらっていた奏が愛しくて、優しく接しようと思っただ。

確かにあんな、絶対に奏が辛くなるであろう壮行会を開いたのは、彼を自分の物にしたい、という下心があつたのは確かだ。

でも緋呂と戻つて来た奏の顔を見た瞬間に、そんなのどうでも良いと思っただ。

だから、今までメンバーの1人も招いた事のない家に、酔っ払っている彼を招いたのだ。

決して傷つける為ではなくて、翌日からの日々を少しでも和らげる事が出来ればと思っただのだ。

だけれど、彼の言葉に理性が消えるような感覚がした。

チャンスじゃないのか？と心の中の、もう1人の自分が囁いたのだ。そうして、抱くことによつて、緋呂への失恋よりも衝撃的な何かを彼に植え付けようと、したのかも知れない。

我に戻つた時には既に後戻りできない状態になっていた。

喘ぐ奏に止める事が出来なくて、結局抱いてしまった。

腕の中の奏が身じろぐ。

はっとして、急いで涙を拭っただ。

「・・・い、つき？」

焦点の合わない瞳で俺を捕らえると、奏は困つた様に笑っただ。

「な、なんで？・・・だいたなの？」

涙を堪えながらの言葉に、後悔が再び襲っただ。

「違うよ、責めているんじゃないよ」

そつ言う奏の瞳には涙が浮んでいて・・・。

俺は言っている意味が解らなくて、その涙を拭っただ。

「・・・僕は馬鹿だから、ちゃんとした言葉にしてくれないと意味がわからないよ。それとも意味なんてないの・・・？」  
奏が何を指しているのか理解して、戸惑う。

「・・・いつちゃん？」

奏が答えを待っている。

本当に、いいのか？

俺の気持ちを言葉にして、伝えていいのか？

自問自答の末、俺は想いのたけを愛しい、大切な人に伝えた

「奏？・・・聞いてるのか？」

樹の声が僕を過去から呼び戻す。ゆっくりと視線を上げると、やっぱり苦しそうな顔の樹が居た。

「俺は、卑怯な男だよ。・・・失恋したお前を自分の物にしようとしたんだ」

静かな樹の言葉が僕に浸透する。

あの日、確かに僕は失恋し、自棄酒を飲む位には落ち込んでいた。そうして奏の家に行き、・・・。

でも、あの時の僕は奏に抱かれながら、緋呂を思い出しただろうか？  
熱に飲まれながら、必死にしがみ付いたのは・・・僕？

彼の想いにつけ入り、寂しさを紛らわした。

卑怯だったのは・・・自分だった。

「ごめんな、奏。・・・もう、自由になっていいぞ」

樹の声が木魂する。

小さく笑い、樹が僕から離れていくのが解った。

え？何処に行くの？いつちゃん

声にならない想いが頭を擡げる。

僕を、置いて行くの？いつき・・・

遠ざかる背中に投げかける。

・・・すきなのに?!

その単語が合図だった

離れなければいけないと思った。手放さなければいけない。

無理やり始めた関係だから、壊れるのも簡単で。

奏の瞳には俺は映っていないのだ。

いつも何処か遠くを眺めているその瞳に、少しでも映れる隙間があったなら、頑張れたかもしれない。

2年という歳月が変えてくれると思っていたのが間違いで・・・

結局俺は耐えられなかったのだ。

縋る奏が俺を見てはいない、という現実。

可哀そうな奏は、又傷つくのだろうか。

今度は誰が癒すのだろうか。

その瞳に映るのは・・・?

「樹!!」

声と共に何かの勢い良くぶつかる。そうして何かの俺の体に巻きついた。

それが奏の腕だとわかり

「僕から逃げるのか?! そんなの許さない!!」

奏の叫び声でした。

必死に駆け出し、彼を呼び止める。

逃がさない為に僕は抱きついていて

「か、なで?」

困惑した樹の声が頭上からふってくる。

言わなければいけない、伝えなければならぬ事があった。

2年間もの長い間、僕の逃避行に付き合わせた謝罪と、この想いの

丈を　　。

「逃げるの？・・・樹は、僕を1人にして平気なの?!あの日、僕を抱きながら『愛してる』って言ったのは嘘・・・!?!」

「!?!?・・・嘘なわけあるか!?!」

僕の叫びに樹は驚いた様に叫ぶ。そうして僕の事を抱きしめた。

その瞬間僕の心は満たされる。安堵の溜息が零れた。

「確かに僕は緋呂ちゃんの事、好きだったよ。でも、その想いを忘れさせてくれたのは樹だった・・・。長い間、僕の逃避行に付き合せてごめんね、そしてありがとう」

やっと、伝えられた、謝罪の言葉。それから、もう一つ・・・。

抱き締められながら、僕は樹に腕を回す。

そうして、想いの丈を伝える為口を開いた。

「・・・僕も、樹の事、愛しています」

僕に巻きついてた腕が、更に強く心地良かった

。妙に寒いな、と思い、目を開ける。

カーテンを開けると、空から大粒の雪が舞い降りていた。

情事の後というのもあり、気だるさを覚えながらそっと隣を見ると、小さな寝息を立て樹が眠っている。

奏の頬が自然に緩んだ。

身じろぐ樹に顔を近づけ、起きないようにと細心の注意を払い口付ける。

それだけでも、心の中が温かくなり奏は幸せを噛み締めた。

「樹・・・いつちゃん、何時までも側にいてね?・・・愛しています・・・」

静かに寝息を立て眠っている奏を見詰める。

離別を覚悟していたから、なんだか可笑しな気がした。

窓の外を見ると大粒の雪が舞い降りて来る。

ふと、緋呂の顔が浮んだけれど、もう脅威を感じる事はなかった。

初めての、奏からの愛の言葉に樹は幸せを噛み締めていた。

「2度と逃げない。俺がずっと側にいて守ってやる」

密かな決意を言葉にし、隣に眠る奏に口付ける。

そうして愛の言葉を囁いた。

「愛してる、奏・・・」

END

## 真実（後書き）

いかがでしたでしょうか。

拙い文でしたが、少しでもお気に召して頂ければ幸いです。

次回も是非ご覧頂ければ、と思います・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1839/>

---

いつわりの恋

2010年10月10日19時41分発行